
東方行者放浪伝

大トロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方行者放浪伝

【Nコード】

N5047Z

【作者名】

大トロ

【あらすじ】

旅をしていた青年が過去に跳ばされて、現代に向かうべく更に旅をする。

全国各地津々浦々、東奔西走七転八起。

お供を連れて今日も楽しく行脚と洒落込む。

俺と傘とオールドジャポン（前書き）

はじめまして、大トロです。

ゆるくまったり書いていこうと思ってます。

もう先達がかなりいらっしやいますので、偶にネタ被りなどあるかもしれませんがどうぞ読んでやって下さい。

俺と傘とオールドジャポン

雨後の澄んだ空気のする峠を歩く。

昨日は夕方から盛大に降ってきたけど、バス停に無造作に捨てられてた古い和傘を拾っていてよかった。

濡れはしたがそれも許容できる範囲の内に、既に放置された廃寺を見つけて駆け込めたのだ。

乾かす為に一応室内で干しておいた上着は未だ少し湿っているけど、この天気なら歩いている内に乾くだろう。

凝り固まった背筋を伸ばして、旅の今までを振り返る。

些細な事がきつかけで親父と喧嘩して高校卒業と同時に家を飛び出した俺は、日雇いのバイトなどをしながら諸国漫遊の旅をしている最中だ。

母親には偶に電話で会話する、その度に戻ってこないのかと聞かれるがこの旅を通じて、俺は何かを掴めそうな気がしてたんだ。

それが見つかるとは戻らないと告げると、溜息と共に呆れた声で無理はしないと言われる。

今の状態が社会不適合者と言われてもしょうがないのは理解してるけど、その土地の人々との一期一会を楽しんだり、山や峠を踏破する度に自分が変わるのが解る。

俺は色んな事に手を出しては飽きたら止めるを繰り返してたから、この旅だけはやり遂げようと思ってる。

中途半端で終わるのはもう嫌なのだ。

にやにやしながら浸る俺って気持ち悪いな。

苦笑しながら自分を嘲っていると　　後ろから嫌な気配を感じる。

振り返ると一台の車が濡れた路面でスリップしてこちらに向かって突っ込んできていた。

信じられない、なぜ、俺が。

そんな事ばかり思い浮ぶ、実際直面すると体が動かなくなるのは嘘じゃなかったみたいだ。

後ろはガードレールしかなく、越えれば崖下へと真っ逆さま。まず間違いなく助からない。

突然の事に呆然としてた俺を車は軽く跳ね飛ばした。

人事の様に思えるこの状況、まるで悪い夢。

少しの浮遊を楽しんだ後は落ちるしかない。

眼下に広がる森が地獄の様にも思えてくる。

もうすぐ目の前に近づく大地に、足掻きようも無く、俺は全てを諦めた。

「さ。旦那」

誰かの声が聞こえる、俺は死んだのでは無かったのか？
もしかして助かったのか？

「旦那さん！ いい加減起きて下さいな！」

「うおわああ！ なんだあ!？」

耳元で聞こえた大音量に朦朧としていた意識も浮上する。

思わず叫んだ俺に誰が文句を言えようか。

飛び上がった辺りを見回すように首を振る俺は、傍から見ればさぞ滑稽だろう。

ふと、視界の端に青色が写る。

視界を下の方に向けると、そこには空色の髪に、クリクリした青と赤の瞳でこちらを見つめる美少女がいた。

「は？ え？ なにこれ？」

「旦那さんってば死んだようにずっと寝てるから流石の私も必死になっちゃったよ。まあ、旦那さんが驚いた分、お腹は満たされたけど」

意味が、わからない。

というかこんな髪の色って、しかもオッドアイで美少女って いやいや、そうじゃない。

「俺……生きてる……?」

「なに？ 旦那さんって幽霊だったの？」

「いやいやいや、足はちゃんとあるし心臓は動いてる。呼吸もしてる。死んでない」

矢継ぎ早に自分の体を確認しても、崖から落ちる前と変わりはない。強いて違いを挙げるなら。

「傘がない……そして君は誰だ？」

あの古ぼけたバス停で拾った傘がないのと、この元気のいい少女だろつ。

俺を旦那さんと呼ぶ少女、自分の記憶を辿ってみれど覚えは無い。こんな印象強い子を忘れるなんて、やろうとしてもできるもんじゃないだろうし。

「あちしは多々良小傘、旦那さんがバス停で拾った傘の付喪神よ！」

「付喪神？」

付喪神とはあの100年経ったら物にも魂が宿るとか何とかの奴だったっけ？。

座敷童子なら地元で見たことがあるけど、付喪神なんてのは初めて見た。

いや、座敷童子を見たなんてのも今考えれば眉唾物なんだけど。というかこの子が持つてるのってあの傘か。

「大分昔に傘職人のお爺さんが貴族に作った傘なの。それが人の手に渡るにつれてこんな茄子色の傘なんて流行らないって、あのバス停に捨てられたのさ……妖として生きるには現代は居心地が悪すぎて私が出ることはできなかつたんだけど、旦那さんが拾ってくれたお陰で出てこれたから嬉しいよ！」

そう言いながら棒立ちする俺の腹に嬉しそうに抱きつく小傘。

悲しいことを元気に言う子だなあ、それと妖怪の癖になんとというポジティブシンキング。

俺に捨てられるとは思ってないのだろうか。

いや、和傘って好きだし、結構気に入ってるから捨てはしない、美少女だし。
ちよっと変わってるけど。

「今まで出てこられなかったのが何で急にでてこられるようになったんだ？」

ふと疑問に思ったことを小傘に尋ねる。
落ちた衝撃でなにかしらの能力でも発現したのか？

「んー、なんか妖気とか霊気とか、そういう気が濃いからじゃないかな。私の感覚だとこの気の濃さは現代じゃないっぽいし、まだ妖怪がそこらへん歩いてるから。つまり、まだ幻想になってないってことだよ！」

「ふーん……いやいやいや、現代じゃないってなんぞ!？」

余りにも普通に答える小傘に、思わず聞き流してしまいそうになった。

現代じゃないっぽく、『まだ』幻想になっていない。
つまり考えられるのは。

「過去にタイムスリップしたってことかよ……」

「そーいうことだね！」

傘を掴んでゆらゆら俺の周りを楽しそうに浮かぶ小傘に少しイラッ

とした。

俺と小傘先生の授業（前書き）

続けて投稿。

俺と小傘先生の授業

能天気な小傘に少しだけイラっとしつつも、小傘から情報引き出しつつ整理する。

まず『気』というモノについて。

「気っていうのは世界のどこにでもある力かなー。妖怪には『妖気』があるし、神様には『神気』。人間だと『靈気』とかね。それを使って弾を作ったり、神様なら奇跡を起こしたりね」

「漫画とかの『気』と大差ないってことか」

つまり気＝力ということらしい。

その力の大きさによってできる事が増えたりするし、そもそも力が小さいとそれらを感じることにすら儘ならぬらしい。

俺のいた世界でそういうのが少なかったのは現代人にとって必要の無いものになったからか、はたまた元々人間の力は小さいのか。

要は超常的な事を種も仕掛けもなくできるようになる不思議パワーってこつたな。

「人間に力の大きいのはそんなにいない、かな。偶に鬼もびっくりする位強いのもいるけど」

「ほうほう……して、俺はどうなんだ？」

男の子として生まれたからには、一度はそういうモノに憧れを抱くだろう。

具体的には元気玉とか霊丸とか。

わくわくしながら小傘に尋ねてみる。

「私はそういう霊視とかできないからよくわからないんだけど……あんまりないかも？　だ、大丈夫！　もし襲われても私が旦那さんを守るから！」

当の小傘は居心地が悪そうしている、

まあ、最初から期待しちゃうくないが、目の前で言われるとそれはそれでがっかりしちゃう。

だって、男の子だもん。

つつか少女に守られる俺、情けなさすぎる。

気を取り直して、次は妖怪について。

俺が見た事がある妖怪っぽいものは座敷童子しかいない。

あの子が本物なのかすら怪しいところなんだが、それ以外は目の前にいる小傘だけ。

おそらくは元の時代に帰るのは無理だろうから、結局この魑魅魍魎溢れる倭国で暮らすしかないのだ。

未来に行く手段なんぞ思いつかないし、時代はわからんが昔の日本でデロリアンなんてあるわけがない。

「妖怪つてのはやっぱ危険なのか？」

「うーん、確かに大多数は人間の肉を好んで食べたりするけど。全部が全部そうとも言えないかなー。私には『人間を驚かす程度の能

力』があるんだけど、それを使って人間が驚いた時の感情を食事にしたりするし、他にもそういう妖怪がいるかもしれないから」

「そういえば、俺が起きてビビッて叫んだ後にお腹が膨れたとか言ってたな……ん？ その、『程度の能力』？ ってのは何なんだ？」

妖怪固有の能力とかそんなんだろうか？

というか人間を驚かすのに能力なんて必要なのか。

逆に考えると、その能力がないと人間を驚かすことなんてできないのか……。

ところで涙を誘う唐傘お化けだな、小傘よう。

「どこかであちしが哀れまれた気がする……おほん。『』程度の能力』 っていうのは種族問わずに条件なく発現する能力のこと。霊力の扱いが上手なら『霊力を扱う程度の能力』とかね」

「なんだかよくわからんが、先天的に使えてたー、とか気が付いたら使えてるーとか、そういうことか？」

「うん、まあそんな感じ」

なんともまあ、さっきの『気』より謎が多いな。

不思議パワーの名称はむしろこっちの方が相応しい気がしてきた。超常現象ここに極まれり。

俺にもそんな能力があるのかね？

「その程度の能力ってのはどうやって気づくんだ？ 名称とかさ？」

「私の場合は驚かすことができないとお話にならないからなー、気が付いたら頭に浮かんでたって感じかな……能力を使っても現代の

人間は驚いてくれなかったけどね」

ボソツと最後の呟きが聞こえて、思わず心の汗が目から出そうになるぜ。

それはともかくとして、頭に思い浮かぶのか。

試しに座禅でも組んでみよ。

姿勢を正して、心を空に、唯只管に己の内へと潜っていく。

深く、深く、深く。

「これか！」

「うひゃい!?!」

頭に能力名が思い浮かんで、少しばかりテンションがあがってしまったようだ。

俺の様子を不思議そうに見ていた小傘は、可愛らしい悲鳴をあげて涙目になっている。

なるほど、これが『萌気』か……。

と、馬鹿な事を考えてないで謝らなきゃな。

「すまん、悪気はなかったんだ。ちょっと俺にその能力ってやつがあるのか確かめたくてさ」

「うう……いいんだけど、驚かす私が逆に驚かされた事が少しシヨック」

「ま、まあ、驚かす案については今度俺も一緒に考えてやるから。それで能力なんだけど　どうやら俺には『縛る程度の能力』があるみたいだ」

俺の能力の名称にぽかんと口を開ける小傘。
と同時に何故か顔が赤くなっていく。

何か深刻なことでもあったのだろうか。
思わず心配して小傘が口を開くのを待った。

「　　なんといいわけですか」

おい、ちょっと待て。

俺と小傘先生の授業（後書き）

さくさく年代ジャンプするし、モブ妖怪はルドン送りします。
大まかなプロット自体は作ってあるので、後は私の筆のノリ次第。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5047z/>

東方行者放浪伝

2011年12月17日02時52分発行